

## 第 19 回茨城県障がい者スポーツ研究会 シンポジウム報告書

### 1. シンポジウムの概要（齊藤先生の挨拶）

茨城県障がい者スポーツ研究会では、県内の障がい者スポーツ環境の現状を踏まえ、茨城県における障がい者スポーツ振興のあり方について検討するため、毎年シンポジウムを開催している。茨城県の障がい者スポーツ協会設立の提言もしてきたが、期待した全国障がい者スポーツ大会 2019 が中止になって、コロナ明け 4 年ぶりの対面開催。

つくばには「聴覚障害学生が学ぶ筑波技術大学」と「筑波大学」があり、デフスポーツに関する情報発信最前線であり、登壇する 3 名と指定発言の及川先生も皆さん「つくば」所縁で、デフスポーツとの関わりがあることから社会でのデフリンピックやデフスポーツ、聴覚障害についての認知度や機会を高めるために開催した。

デフリンピックの日本開催も決定し、茨城県、そして「つくば」からデフスポーツを通じた誰もが取り残されない社会の実現について一緒に考えましょう。

日 時：2023 年 12 月 10 日（日）14:00～16:00

会 場：筑波大学 5C 棟 216

参加費：無料

テーマ：「聴覚障害者スポーツを通じた共生社会～茨城県からの発信～」

登壇者：大杉 豊（筑波技術大学教授、国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）副会長）

中村 有紀（筑波大学女子ハンドボール部 OG、

日本ハンドボール協会デフハンドボール専門委員会委員長）

仲井 健人（筑波大学蹴球部 OB、デフサッカー選手）

指定発言者：及川 力（筑波技術大学名誉教授）

司 会：中島 幸則（筑波技術大学）



## 2.講演

大杉 豊氏 【聴覚障害者スポーツを通じた共生社会-外見でわかりにくい聴覚障害者・見た目

### には違いがわかりにくい聴覚障害者スポーツ-】

聴覚障害スポーツはスポーツにおいてどのような位置づけかは、整理されておらず、パラリンピックでは基本的に聴覚障害者は含まれていない。聴覚障害者は、外見でわかりにくく、聴覚障害者スポーツもまた、一般的なスポーツとの違いがわかりにくい。

つくば市では、「スポーツで“つながる”まちつくば」をスローガンに、東京 2020 以降、体育館での車いす競技の許可や、ボッチャ等の体験企画の実施、スポーツ推進委員向けの研修の実施、障害者の体力づくり支援、スポーツ施設のバリアフリー化、ユニバーサルデザインの新施設、パラアスリートへの理解と支援がされている。

東京 2025 デフリンピック前後では、スタートランプ（陸上・水泳競技等）などの設置、デフスポーツの体験（耳栓の使用など）の実施、聴覚障害児の体力づくり支援、情報アクセシビリティについて、聴覚障害当事者の意見、デフアスリートへの理解と支援を目指す。そのためには、知識・理解を

深めるために情報アクセシビリティとコミュニケーション保障とは何か、国際手話をはじめとした聴覚障害者の言語と文化、デフスポーツの歴史と文化（ICSD）の理解が重要である。

東京 2025 デフリンピックに向けて、学生教育とホストタウンという 2 つのキーワードが挙げられる。学生支援では、筑波大学および筑波技術大学の体育系の学生・海外からの留学生等、きこえる学生ときこえない学生を対象に育成プログラムの開発と実施を目指す。ホストタウンは、東京 2020 の時はつくば市がスイスの選手団を迎えて交流を深めた。デフリンピックでもつくば市のホストタウン実現を期待する。「スポーツで“つながる”まちつくば」の取り組みとの連携と推進、情報・文化の交流、練習会場の提供、選手団の市民との交流、筑波大学・筑波技術大学出身のデフリンピアン輩出を目指している。

#### **中村 有紀氏 【聴覚障害者スポーツを通じた共生社会～デフハンドボール～】**

世界では、1969 年第 11 回デフリンピックから、ハンドボールが競技として採用されたが、日本のデフハンドボールについて、日本はこれまでデフリンピックのハンドボール競技に出場したことはない。2022 年春にデフリンピック出場を目指したいという技大の学生小林優太君が、中島幸則先生に顧問を依頼してハンドボールサークルを立ち上げ、ハンドボール経験者である中村にも声がかかり、「なんとかしないと…」と活動を始めた。デフハンドボール体験会を行うなどしてきたが、次に進む何かを模索していたところ、岩手出身の水嶋貴一（みずしまきいち）に出会う。彼は中学 3 年時、顧問からデフリンピックの存在を教えてもらい、ハンドボール競技でデフリンピック出場を目指すも日本にはデフハンド

ボールチームが無いことを知り断念。しかし、今年 6 月に技大に通う後輩からデフハンドボールサークルの存在を聞き、再度デフリンピック出場を目指している。ポジションは、ハンドボールで特殊なポジションである GK である。経験者であり、やる気のある彼の存在は、日本のデフハンドボール界に大きな影響を与えた。

2023 年 12 月 3 日、日本ハンドボール協会指導普及本部、デフハンドボール専門委員会設立により、2025 年までにデフリンピック 2025 を通したデフハンドボールの普及、2026 年以降もデフハンドボールを通じた共生社会の実現を目指している。

デフハンドボールを通じた共生社会として、チームや家族のポジティブな変化、地域でのきこえる人ときこえない人のハンドボールを通じた交流などが挙げられる。

### **仲井 健人氏 【聴覚障害者スポーツを通じた共生社会～茨城県からの発信～】**

聴覚障害についての基礎知識として、健聴者と伝音声難聴、感音性難聴の違い、補聴器は聞こえを補うものであり、聴覚障害者が補聴器をつけても必ずしも聞こえるようになるわけではないこと、聴覚障害者とのコミュニケーションとして、読話、筆談、手話があることが挙げられる。障害のある人がスポーツをしたいときに適切な指導ができる人がいることなど、多様な選択肢と機会があることが仲井の考えるあるべき姿である。

サッカー指導者は、聴覚情報中心の指導で聴覚障害があると、指示・フィードバックが分かりづらいこと、チームメイトやスタッフとの関わりが言語でのコミュニケーションになるので、困難があった。デフサ

サッカー指導者は、視覚情報優位の指導で、作戦ボードの使用、板書の多様や手話でのコミュニケーション、資料の活用などの環境に差があった。

国内・海外におけるサッカー指導者に関する事例紹介として、障がい者サッカーコースのリフレッシュ研修会（指導者研修会）やハンドブックを通じた理解啓発、JFA グラスルーツ推進・賛同パートナー制度が挙げられる。

**指定発言：及川 力氏 【指定発言者から～聴覚障害者スポーツを通じた共生社会の実現に向けて～】**

聴覚障害者スポーツを通じた共生社会の実現に向けて、42 年間に取り組んだ課題として、運動能力の発達、平衡機能調査、聴覚障害児童・生徒のためのシャトルランテスト機器の開発と適用、聴覚障害者のスポーツ指導法の確立、ICSD が IPC を離脱した要因の研究などが挙げられる。

大杉先生の発表に関連して、多感覚情報利活用の重要性、デフスポーツ体験の難しさ、デフスポーツの理解がなぜ進まないか、聞こえないことが生活やスポーツにどのような影響を与えるかの理解・啓発、ICSD 改革への期待が挙げられる。

中村先生の発表に関連して、リクエストを拾い上げる体制（ネットワーク）の整備の重要性、トップリーグ等における体験イベント開催の効果、聴覚障害者スポーツ指導経験者増加の効果が挙げられる。

東京 2025 デフリンピックの際、テレビ中継がされた場合では、競技解説とともに聴覚障害特性の

解説を加えること、東京 2025 デフリンピック開催の成功を祈っている。

## 質疑応答

Q) デフスポーツとパラスポーツとの関わりについて

A) 今後、再び一緒になることはありえない。しかし、共生社会の実現のために一緒になるではなく、連携を取っていく。今後発信していく。(大杉氏)

A) パラスポーツとデフスポーツだけでなく、全てのスポーツが連携し、互いを高めていける姿が理想である。(仲井氏)

O) デフスポーツと行政との関わりについて

A) 優勝チームであるクロアチアのチームをつくばに招致し、強化練習等を行うなどを期待している。  
(大杉氏)

## まとめ

デフスポーツ・聴覚障害者スポーツを通じた共生社会の実現に向けて、茨城県から発信して、デフスポーツ・聴覚障害者スポーツの理解を広め、指導者や社会に認知度を高めていきましょう。